

「魚津エクスターンシップ」開催報告 ～住みよいまち・魚津の、新たな人材還流戦略～

研究員補 川尻 知弥

目次

1. 魚津エクスターンシップとは何か
2. 魚津市の概要と、魚津エクスターンシップのコンセプト
3. プログラムの振り返り
4. 参加学生の感想から見る魚津エクスターンシップの効果

1. 魚津エクスターンシップとは何か

2017年8月1日、「魚津エクスターンシップ」に参加する明治大学の学生26名が富山県魚津市役所に集った。魚津エクスターンシップとは魚津市が主催する地域滞在型インターンシップであり、2016年夏に長野県長野市で開催された、同じく地域滞在型インターンシップである「信州エクスターンシップ」から着想を得ている（信州エクスターンシップの概要については、川尻（2016）を参照）。

信州エクスターンシップの提唱者である吉澤潔氏は、名称をインターンシップではなくエクスターンシップとした理由を、『『長期のシューカツのパーツとしてのインターンシップ』との違いを明確にしたいから』としている（吉澤，2016）。魚津エクスターンシップもそのスタンスを踏襲し、大学3年生以下のみ参加応募可とした。

魚津エクスターンシップは、魚津という地域社会の一員としての生活を短期間ではあるが体験することで、住み働く場所としての魚津の魅力について学生が考える契機となり、将来的には若者のUIターンに繋がることを目指している。

当研究所は魚津市からの委託を受け、明治

大学社会イノベーション・デザイン研究所、シダックス総合研究所との協力体制でプログラムの企画・運営を行った。

2. 魚津市の概要と、魚津エクスターンシップのコンセプト

魚津市は、富山湾に面した人口約4万2千人（2017年10月1日現在）のまちである。

魚津市の大きな特徴の1つとしては、「住みよさ」が挙げられる。株式会社東洋経済新報社の2017年度「住みよさランキング」では全国814都市（791市と東京23区）中6位にランクインした（株式会社東洋経済新報社，2017）。ランキング算出にあたっては人口当たりの病院・一般診療所病床数や都市公園面積といった数値が用いられており、魚津市は客観的に「住みよい」環境を有したまちであると考えられる。

そのような魚津市ではあるが、人口は1985年の国勢調査をピークに減少傾向に転じており、老年人口（65歳以上）は増加しているものの、年少人口（0歳～14歳）と生産年齢人口（15歳～64歳）が減少している。特に、男女ともに大学進学や就職を機に魚津を離れるケースが多く、いったん離れた若者は魚津に

戻ってこない傾向にある（魚津市，2015）。

魚津市には住みよさの他に、上質な水資源を有するという特徴もある。市の南東部には、市境となっている2,000m級の毛勝三山（毛勝山・釜谷山・猫又山）が連なっており、それらの山々を水源とする片貝川が海岸線まで約25kmという急勾配で富山湾に注ぎ込んでいる。急流・片貝川は途中で不純物が混ざることがなく、良質な状態を保ったまま富山湾へ流れる（魚津市企画政策課地域資源推進班，2015）。

上質な水資源は、農業・漁業・工業といった産業とも密接に結びついている。また、1997年12月に国の重要無形民俗文化財、2016年12月にユネスコ無形文化遺産に登録された「たてもん祭り」は大漁と漁業の安全を祈る行事で（魚津市，2014）、間接的ではあるが文化とも関連している。

魚津エクスターンシップでは水という自然資源を例として、都会ではなかなか感じる機会の得られない、自然と産業・文化・生活との繋がりを体験するというコンセプトの下、プログラムを企画した。

3. プログラムの振り返り

本章では、学生が1週間にわたり実際に取り組んだプログラムについて、タイムスケジュール（表）を見つつ振り返っていく。

初日（8月1日）は魚津市役所に到着後、阪井和男・明治大学法学部教授によるオリエンテーションが行われた。魚津エクスターンシップの意義についての説明や「本気のあいさつ」を通して、学生たちは参加にあたっての心構えを整理し、1週間共に過ごす仲間としての意識を高めていた。

オリエンテーション終了後学生たちは夕食を取ったが、夕食（写真1）の献立にも前章で述べたコンセプトが活かしている。8月1日から4日の夕食は、魚津地場産直売倶楽部「お

（写真1）8月1日の夕食



（表）7日間のスケジュール

日程		
8月1日	午前	東京からバス移動
	午後	オリエンテーション
	夜	グループワーク
8月2日	午前	企業・団体訪問とインタビュー（1社目）
	午後	企業・団体訪問とインタビュー（2社目）
	夜	グループワーク
8月3日	午前	企業・団体訪問とインタビュー（3社目）
	午後	企業・団体訪問とインタビュー（4社目）
	夜	グループワーク
8月4日	午前	農業体験
	午後	グループワーク
	夜	たてもん祭り
8月5日	午前	株式会社伊藤園によるお茶セミナー
	午後	埋没林博物館・魚津水族館見学
	夜	UO! JAZZ・花火大会観賞
8月6日	午前	グループワーク
	午後	
	夜	せり込み蝶六
8月7日	深夜	グループワーク
	午前	成果発表会
	午後	フェアウェル・パーティー

いで安」(1日)、JAうおづ女性部(2日・3日)、食生活改善推進連絡協議会(4日)の方々の調理によるものであり、魚津の農産物と魚介類が主な食材として用いられた。

2日と3日の日中、学生はあらかじめ決められた企業・団体を4名ないし5名のグループ単位で訪問し、そこで働く職員へのインタビューを行った。2日間で、地元・魚津に根付いた12企業・団体による協力をいただき、夕食調理の協力をいただいたJAうおづにも3日に2グループが訪問した。

4日の午前は、グループごとに農業体験を行った。体験訪問先によって収穫した品目は異なるが、魚津の自然の恵みに直接接触れ、生活と自然の繋がりを感じた学生も多かったのではないだろうか。

学生たちは、4日夜の「たてもん祭り」(写真2)、6日夜の「せり込み蝶六踊り街流し」(写真3)にも参加した。たてもん祭りでは、

(写真2) たてもん祭り



(写真3) せり込み蝶六踊り街流し



漁船を模った山車「たてもん」を、回転奉納を行う諏訪神社まで約500m曳く「曳き手ボランティア」として参加した。江戸時代より伝えられ、舞い踊るさまが蝶のようということでも名付けられた市の無形民俗文化財である「せり込み蝶六踊り街流し」には、2度の練習の後魚津市役所チームとして参加した。参加学生ほぼ全員にとって、地域社会の祭りの雰囲気にとっぷり浸かる経験は初めてで、心揺さぶられ感動の涙を抑えられない学生もいた。

5日午前は、魚津エクスターンシップへの協賛企業の1つである株式会社伊藤園による「魚津のおいしい水を使ったお茶の入れ方セミナー」が開催され、魚津の上質な軟水で入れるお茶にみな舌鼓を打っていた。夜には、今年初開催となる「UO!JAZZ」と花火大会を觀賞した。

グループワークでは、林義樹氏(一般社団法人参画文化研究会代表)と河島広幸氏(明治大学サービス創新研究所研究員)の指導で、学生が五感をフルに働かせて体験したことをその日の「感想」・「気づき」・「自分(たち)にできること」として毎日それぞれ50字程度で書き留めて、グループ内で共有した。共有された内容をもとにグループディスカッションを行い、「魚津をもっと魅力的にするのに私たちにできることは何か」という全グループ共通テーマの下、成果発表会での発表に向けてブラッシュアップしていった。特に6日は全グループが深夜まで発表の準備に取り組み、メンバー同士の大きな葛藤を経験したグループもあった。最終日(7日)の成果発表会では、全6グループが、各自作成したポスターをもとにこの6日間の成果を発表した(写真4)。午後のフェアウェル・パーティーでは、グループを越えた学生同士の交流、企業の方々と学生との交流が見られた。中には「また魚津に来ます」と宣言する学生もおり、終始和やかなムードであった。

(写真4) 投票で最優秀賞を獲得したグループの発表風景



4. 参加学生の感想から見る魚津エクスターンシップの効果

1週間にわたるハードなプログラムを通じて、学生は何を得てどのように変わったのか。本章では、全プログラム終了後の8月8日から10日にかけて実施した学生への記述式アンケートの回答結果より、魚津エクスターンシップの効果を探る。アンケートについては26名全員からの回答を得ることができた。

アンケートでは魚津エクスターンシップ参加前と参加後の変化について問い、結果としては、「地方に対する見方がポジティブに変わった」という内容の回答が最も多く見られた。具体的には、「人と人との繋がりが強い」など魚津の方々の人柄に触れたことによる変化、「田舎は遊びに行くところだと思っていたが、生活する場所としても魅力的」という地方に対する不便なイメージが変わったことを示唆する回答が見られた。期間中は、グループワーク以外の時間で可能な限り魚津の方々とお話をする機会を設けており、例えば夕食の時間にも各日に調理の協力をいただいた方々に学生の輪の中に入れていただいた。限られた時間の中の交流ではあったが、魚津という土地での人間関係に好印象を持った学生が多いようだ。また、地方に対する不便なイメージが変わったのは、プログラムの構成

上魚津市内をバスで移動することが多く、その際に学生がよく街並みを観察した結果ではないだろうか。

そして上記の感想とほぼ同数、「祭りに参加してよかった」という感想が得られたことは、特筆に値するだろう。祭りの独特な「雰囲気」・「熱気」という目に見えないものに心揺さぶられ涙を流したり、「よその人間である我々が土足で入って行ってもいいのかな」と神々しさを感じる若者が少なからずいることにもう少し注目すべきかもしれない。

今後さらに参加学生を対象とした調査・分析を継続し、魚津エクスターンシップの効果をより詳細に検証したい。

【参考文献】

- ・川尻知弥 (2016) 「信州エクスターンシップ」開催報告～長野から始まる、人材還流戦略の改革～ 共済総研レポート, No. 147, pp. 10-15.
- ・吉澤潔 (2016) 地域経済社会ベースのインターンシップが農業セクターの若年層人材戦略を促す 共済総合研究, Vol. 72, pp. 76-91.
- ・株式会社東洋経済新報社 (2017) 第24回全都市「住みよさランキング」の結果
<http://corp.toyokeizai.net/news/wp-content/uploads/sites/5/2017/06/20170620.pdf> (2017年10月31日閲覧)
- ・魚津市 (2015) まち・ひと・しごと創生人口ビジョン
<http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/023/023557.pdf> (2017年10月31日閲覧)
- ・魚津市企画政策課地域資源推進班 (2015) 魚津の水循環パンフレット
<http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/022/022306.pdf> (2017年10月31日閲覧)
- ・魚津市 (2014) 広報うおづ 平成26年9月号